九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

Clinical outcomes of allogeneic stem cell transplantation for relapsed or refractory follicular lymphoma: a retrospective analysis by the Fukuoka Blood and Marrow Transplantation Group

伊藤, 能清

https://doi.org/10.15017/1441339

出版情報：九州大学, 2013, 博士（医学）, 論文博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

KYUSHU UNIVERSITY

氏　名：　伊藤　能清

題　名：Clinical outcomes of allogeneic stem cell transplantation for relapsed or refractory follicular lymphoma: a retrospective analysis by the Fukuoka Blood and Marrow Transplantation Group
（再発・治療抵抗性濾胞性リンパ腫に対する同種造血幹細胞移植の成績：福岡骨髄移植グループにおける後方視的解析）

区　分：　乙

論文内容の要旨

濾胞性リンパ腫(FL)は，緩徐に進行し，化学療法単独で一定の生存期間の延長は得られるものの再発を繰り返し，完全治癒は困難な血液悪性疾患である．同種造血幹細胞移植(allo-SCT)は，免疫学的効果である移植片対リンパ腫(GVL)効果により，再発・難治性濾胞性リンパ腫に対し，唯一，完全治癒が期待できる治療法である一方，移植片対宿主病(GVHD)や移植前処置を起因とする治療関連合併症により治療効果が相殺されてしまう一面もあり，その適応や施行時期については十分な検討が必要である．

日本においては，FL は比較的，発症頻度が少ない疾患であり，allo-SCT の報告例も少ない疾患であったが，近年，増加しており，若年者での発症例も認められ，allo-SCT 適応例も増加している疾患となった．そこで，福岡血液骨髄移植グループ 4 施設において 1997 年～2010 年の期間に allo-SCT を受けた化学療法に再発 FL30 例の結果を後方視的に解析した．17 例が治療抵抗性群，13 例が治療感受性群であった．なお，この症例集積期間は，日本においても，リツキサンが標準的に使用され，移植技術として前処置の強度を減弱させた移植方法(RIST)や臍帯血移植が普及した時期である．

結果は，全患者の観察期間中央値 38.5 ヵ月(4-122 ヵ月)で，2 年全生存率 46.7%，2 年無増悪生存率 46.7%，2 年治療関連死亡率 33.3%，2 年再発率 20.0%であった．生存率に与える影響を検討したが，移植前処置の強度，輸注細胞源では有意差は認められず，既報告と同様に，移植直前の病勢が部分寛解以上の化学療法感受性を有する群において移植後成績が良い傾向が認められた．移植片対宿主病(GVHD)発症と無増悪生存率との関連では，急性白血病などへの allo-SCT 報告と同様に，重症急性 GVHD 発症例では予後不良であり，軽症～中等症急性 GVHD 発症例において無増悪生存率が良い傾向を認め，慢性 GVHD 発症例では再発例を認めなかった．再発・難治性 FL に対しても allo-SCT 施行により長期生存が得られ，特に化学療法抵抗性群においても一定の生存率の向上に寄与している可能性が推測された．